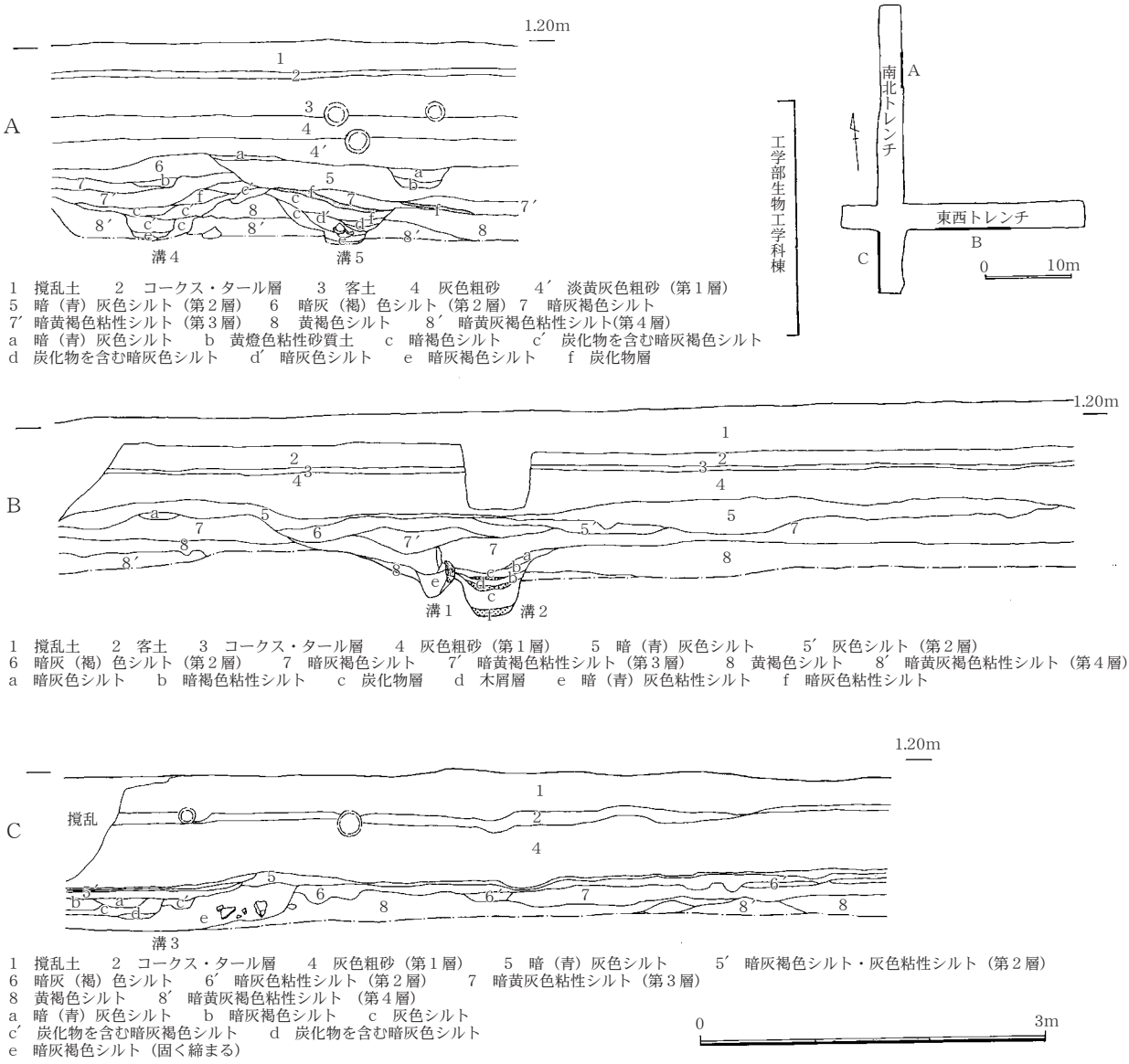
# 第２章　工学部実習棟地点の調査成果

## 第１節　層　　序

今回の試掘調査の主眼のひとつは常三島遺跡の堆積状況を把握することであった。その調査結果を表したのが第８図である。遺構が検出された部分に限定した表示になっているが、遺構との関係によっておよその層序が把握できた。その概要を示すと次のとおりである。

現地表面直下の最上層は徳島大学工学部の構築にともなう造成土や客土であり、一部には焼土やコークス等の堆積が帯状に認められるところもあった。形成年代は戦後である。これら客土の下層には50




**第８図　工学部実習棟地点の基本層序**（縮尺：１／60）

cm前後の厚みをもつ粗砂の堆積が認められる（第１層）。純粋な砂層であり、調査区の全面に均質に認められることから、おそらく徳島高等工業学校構築時の造成土であろうと推定される。なおこの砂層の由来については、助任川の浚渫によって生じた多量の砂を一面に敷き詰めた状態であるとの伝聞もあり、事実関係については未確認ながら、砂の堆積状況をみると納得させるものがある。形成年代は1922年頃だと推定される。

第１層の砂層の直下には灰色シルト層があり、これを第２層とした。堆積は厚いところで40㎝、薄いところで８㎝程度であるが、調査区全面に広がっている。この堆積中には明瞭な遺構が見つからず、近世の遺構は本層位のさらに下層から検出されているので、こうした層位関係からみて、本土層は明治期の水田ないし畑の耕作土であろうと推定される。

近世の遺構は第３層および第４層に位置づけられる。すべてシルト層であるが、地点ごとに色調や締まり具合は異なっている。検出遺構をみると第３・第４層に掘り込まれたもので年代が推定できるものは古いものでも18世紀代に属する。したがって、４層より下方にはそれ以前の近世包含層が埋没している可能性が高い。しかしながら地下水の湧水が激しかったために、図示した範囲より下層については調査不可能であった。

## 第２節　遺　　構

本試掘調査では区画溝と土坑が検出された。ここでは個別にその概要を報告する。

### １．区　画　溝

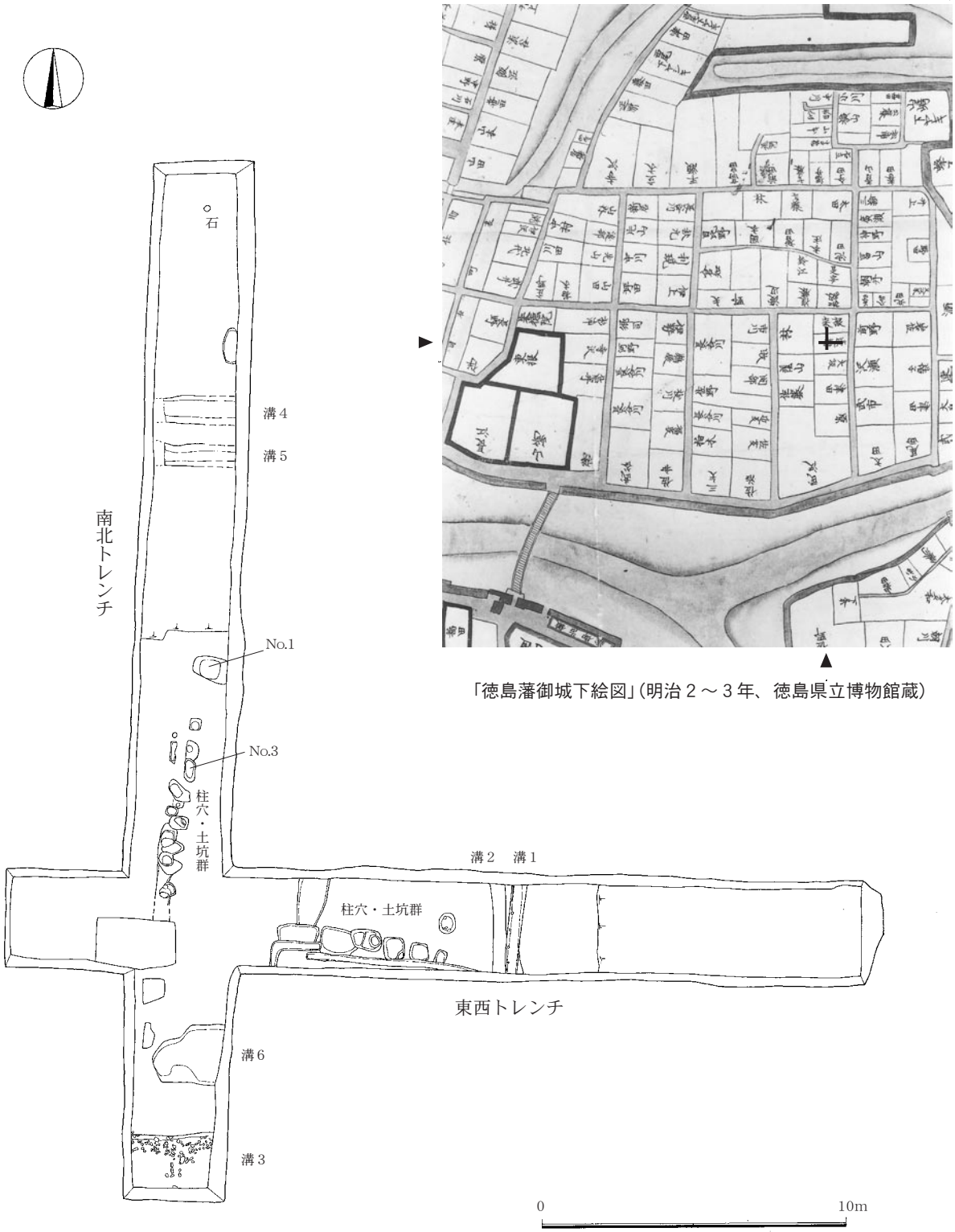
**１）溝１**（第８～10図、図版第１－２・５）

東西トレンチの中ほどで南北に延びる２条の溝が検出された。ふたつの溝は切り合っており、年代的には東側のものが新しい。この新しい方を溝１とした。検出面での幅30㎝、深さ25㎝で、断面はＶ字状を呈する。溝の西側半分には土留めの板を２段に当てがい、この板を支える杭が等間隔に打ち込まれている。溝の両側に40㎝程度の幅で暗褐色土がひろがるが、この土は固く締まっているため、人為的な締め固め土の可能性がある。溝底のレベルは北側がわずかに低いので、南側から北側へと水を流す機能をもっていたものと推定される。

溝の埋土中からは陶磁器類が出土した。しめなわ文茶碗の胴部形態や、柿釉を施釉した土師質のみそ焼き皿などの存在は、19世紀の前半に属する可能性の高いことを示している。層位的には第３層の上面からの掘り込みであるため、幕末期に排水溝として機能していた可能性がある。

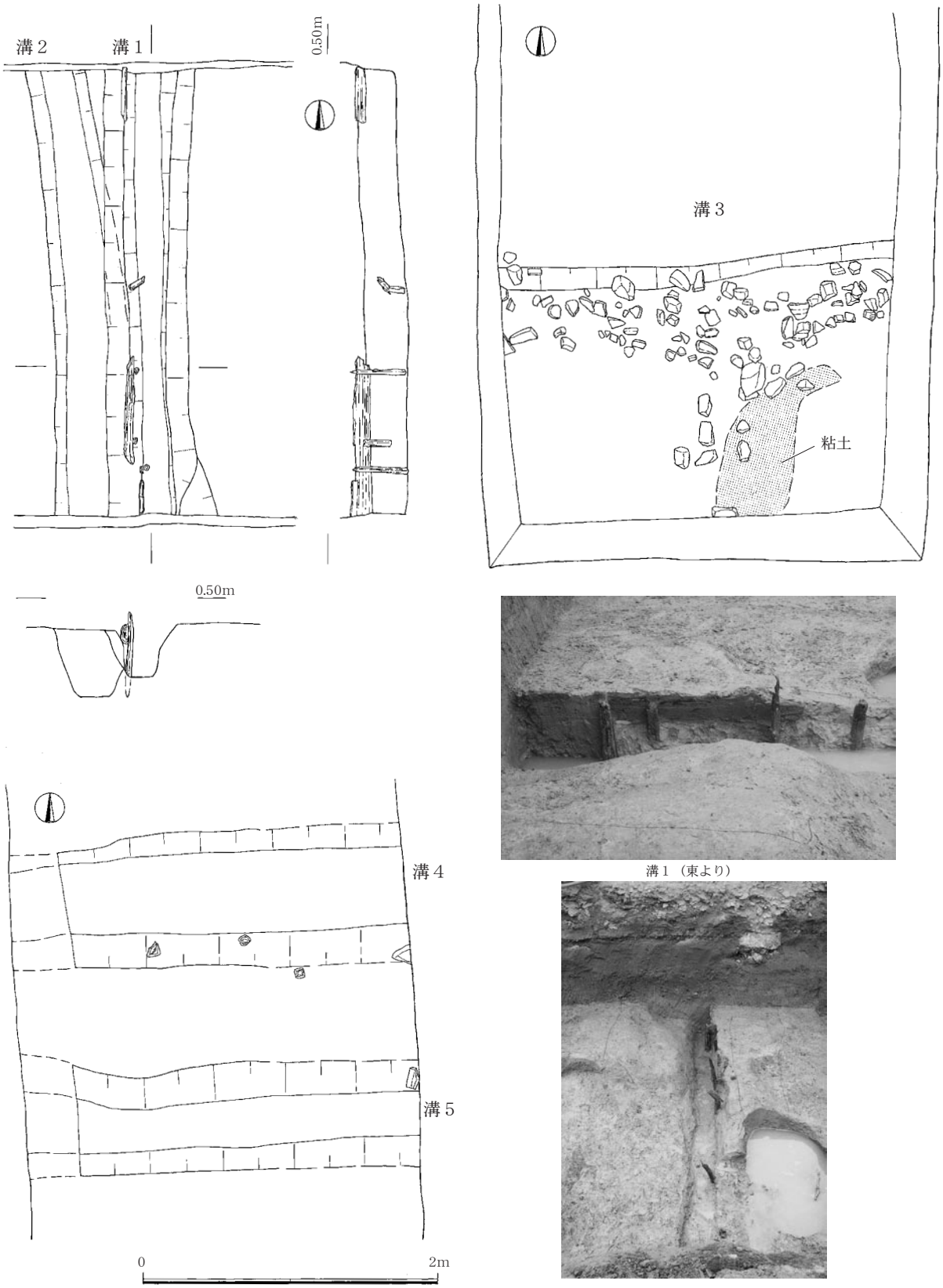
**２）溝２**（第８～10図、図版第１－２）

溝１に接して、一部を切られながら西側に平行して延びる溝が検出され、それを溝２とした。溝１の掘削時に溝２は完全に埋め戻されているので、ふたつの溝は同一の機能を果たす関係にあって、時期差として把握できる可能性がある。上面での幅85㎝、深さ50㎝、下面の幅30㎝をはかり、断面は逆台形を呈する。溝２の埋土中には床面直上と上面付近との２層にわたって木屑の堆積層があり、この溝は付近で行われた建築作業に伴って生じた木屑の廃棄場でもあった可能性がある。出土遺物には陶磁器類




「徳島藩御城下絵図」（明治２～３年、徳島県立博物館蔵）

**第９図　工学部実習棟地点検出遺構配置図**（縮尺：１／200）




溝1（東より）

溝1（北より）

**第10図　工学部実習棟地点検出遺構図・写真(1)**（縮尺：1／40）

や土製品があり、陶磁器類は破片資料が多いが、18 世紀代のものから 19 世紀代のものまでを含む。

**３）溝３**（第８～10 図）

南北トレンチの南端部において第３層上面で検出された遺構で、東西方向に延びる掘り込みである。遺構の北半部を検出したが、この掘り込みは南側が深く北側が浅い。南側は地下水の湧水の関係で完全には調査できておらず、本来はもっと深くなる可能性がある。北側の肩から内側には、角礫や陶磁器・瓦を暗黄褐色粘性土と黄褐色粘土とで締め固めた状態が認められた。

締め固めに用いられた遺物の年代は 18 世紀中頃のものが大半で、わずかに 17 世紀後半のものと 18 世紀末のものが混じる。このことから、本遺構の構築年代は 18 世紀末に比定しうる。

**４）溝４・溝５**（第８～10 図、図版第１－４・６）

南北トレンチ中央部において東西に延びる２条の溝が検出された。このうち北側のものを溝４とし、南側のものを溝５とした。ともに第３層中に掘り込まれたものである。溝４の検出面での幅は約 90 ㎝、深さ 20 ㎝、下面の幅 25 ㎝で、断面は逆台形を呈する。溝４南側の肩付近から斜面には３本の杭が打ち込まれており、これらの杭によって固定されていたとみられる板片が溝の肩部分で検出された。溝１と同様の、板材による土留めの施設が施されたものと推定される。なお溝４の下層には、より大きな窪みがあったことが確認されたが、湧水のために、その性格については追求することができなかった。いっぽう溝５の検出面での幅は約 70 ㎝、深さ 20 ㎝、下面の幅 40 ㎝であり、断面は同じく逆台形を呈する。

これら２条の溝の層位関係は同一層位と判断され、先後関係は確定できず、共存していた可能性が高い。ふたつの溝の間隔は溝の中心で計測して 1.7 ｍあるが、この間には固く締まった暗黄褐色土の盛り上がりが認められ、一部には角礫や瓦などが混入している。こうした状況からみて、２条の溝の中間部には若干の盛土があった可能性がある。

２条の溝内からは多量の遺物が出土した。溝４からは陶磁器類・瓦・漆器片などが出土し、溝５からは土製の馬や風炉をはじめとする大小の陶磁器類・銅銭などが発見された。特に溝５の上面には多量の瓦が認められたことも、廃絶時の様相を示すものとして注目された。

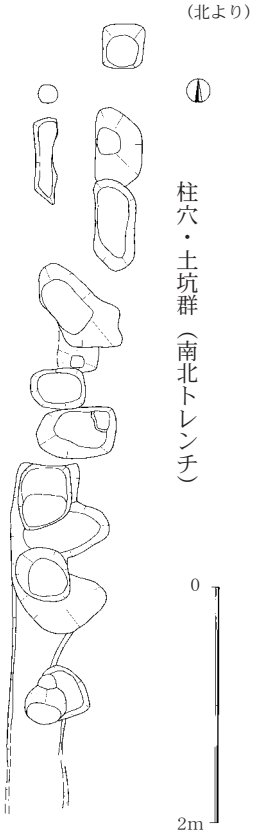
遺物の年代をみると、17 世紀代のものから 19 世紀代のものまで幅広い年代のものが含まれているが、19 世紀前半以降のものが数量的に多い。このことは、溝の廃絶に伴う遺物の多量投棄が幕末期に生じた可能性を示唆する。

**５）溝６**（第９図）

南北トレンチの溝３から約 1.5 ｍ北側で検出された掘り込みである。溝３と平行するような位置関係にあることを根拠に溝と判断したが、掘り込みの西側半分を確認したにとどまり、深さも 30 ㎝前後と浅く、土坑としたほうが適切なのかもしれない。性格は不明である。出土遺物には若干の磁器片と土製品がある。

## 2. 柱穴・土坑群（第９・11 図、図版第１－３）

南北・東西両トレンチの交差地点付近を中心に検出された柱穴群および小規模な土坑群である。また、これら土坑群に重なる形で浅い溝状の掘り込みも確認された。これらはともに列をなしており、南北トレンチでは南北方向に、東西トレンチでは東西方向に延び、直交する関係にある。これら諸遺構は一体




（北より）

**第 11 図　工学部実習棟地点検出遺構図・写真(2)**（縮尺：１／40）

のものであった可能性が高く、南北トレンチで検出されたものに即して構造の概要を記すと、浅い布掘りを行ったのち、50㎝から１m間隔で柱穴を掘り込んでいる。このうち１箇所では底部に礎石が遺存していた。層位関係やレベル差をみると、これら柱穴群のすべてが同時に使用されていた可能性は低く、何回かの掘り返しが実施された結果の累積であろうと判断される。これらを基礎構造として、この場所になんらかの建築物があったことは確実だと思われるが、どれとどれとが組み合うかについての詳細な検討を現地で行うことはできなかった。土坑内の出土遺物には陶磁器類があり、これによって年代的位置づけを考えるとすれば、19 世紀代の可能性が高い。

### 3. その他の遺構（第９図）

発掘区各所から不整形な土坑や窪みが確認された。このほか南北トレンチの北端付近では、掘り込みを伴わない状態で石材が検出された。屋敷内に設けられた礎石の可能性をもつが、単独出土のために詳細は不明である。

## 第３節　出土遺物

出土遺物には磁器、陶器、土器、土製品、瓦、金属製品、石製品がある（第12～19図、図版第２～７）。以下材質ごとに代表的なものを図示し、個別の報告を行う。なお磁器と陶器については、遺構出土のものと包含層出土のものに分けて順次報告する。

### １．磁　　器

**１）遺構出土**（第12図、図版第２）

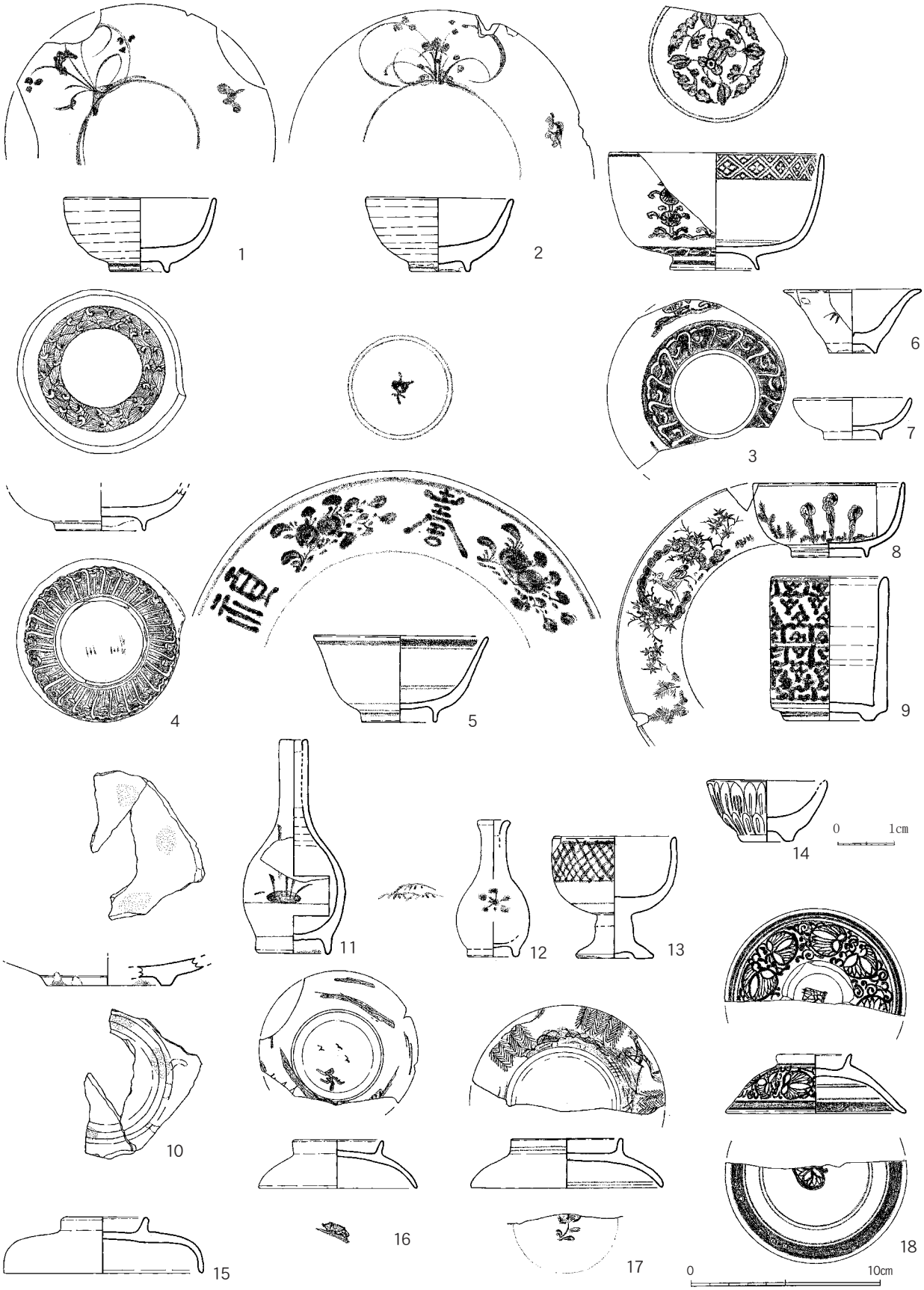
**第12図**１～18は遺構出土の磁器である。１・３・４～６・10・11・18は溝４、２・９・13・15は溝５、７・17は溝６、８は南北トレンチ土坑群№.１、12は東西トレンチ土坑群、14は溝２、16は溝３出土である。

１～４は肥前系の染付碗である。１はやや白色の強い灰白色を呈し、緻密な胎土である。高台外面の施釉は粗く、畳付は無釉で、釉際の処理は不揃いである。畳付全面に砂が付着する。底部は厚く、呉須の発色は悪い。いわゆる「くらわんか手」である。２はやや白色の強い灰白色の胎土である。高台外面の施釉は粗く、畳付は無釉で、釉際の処理は不揃いである。畳付端内側に砂が付着する。器壁は全体的に厚く、呉須の発色は悪い。１と同タイプの「くらわんか手」の碗で、ほぼ完形である。３は高台が「八」の字状に開き腰が張る碗である。胎土は白色の強い灰白色である。畳付は無釉で、釉際の処理は揃う。内面には擦痕が見られる。４は白色の強い灰白色の胎土である。体部の割れ口全体と高台の割れ口に焼継の痕跡が見られ、高台内には焼継の際に入れられた印も見られる。見込には中央部を除き無数の擦痕が見られる。

５は瀬戸・美濃系の染付端反碗である。胎土は白色の強い灰白色である。畳付は無釉で、釉際の処理は揃う。ほぼ完形である。

６は肥前系の染付端反小坏である。胎土はやや白色の強い灰白色である。全体的に施釉は粗く、内外面に釉飛びが見られ、露胎部は橙色を呈する。畳付は無釉で、釉際の処理は粗く不揃いである。畳付端内側に砂が付着する。見込には降灰が見られる。７は肥前系の白磁小坏である。胎土は白色の強い灰白色である。畳付は無釉で、釉際の処理は揃う。見込には降灰が見られる。完形である。

８・９は肥前系の染付蓋物である。８は白色の強い灰白色を呈する精良な胎土である。呉須の発色は良好で、外面全体に細かい気泡が見られる。口縁端部から口縁部内面および畳付は無釉であり、釉際の処理は揃う。ほぼ完形である。溝３出土の破片と接合する。９は白色の強い灰白色を呈する精良な胎土である。呉須の発色は良好で、濃い藍色のダミで文様を描く。外面全体に細かい気泡が見られる。口縁端部から口縁部内面および畳付は無釉で、釉際の処理は揃う。幅広の高台をもつ。




**第 12 図　工学部実習棟地点遺構出土磁器**（縮尺：１／３、14は１／１）

10 は朝鮮の白磁皿である。胎土は黄味を帯びた灰白色を呈し、軟質である。釉薬には透明感がなく、白濁している。見込と畳付には、形の整った砂目が見られる。畳付にも施釉されている。

11・12 は肥前系の染付御神酒徳利である。11 はやや白色の強い灰白色の胎土である。染付による草花文と思われる文様を２方向に描く。畳付は無釉で、釉際の処理は揃う。畳付端内側に砂が付着する。内面は口縁部を除き無釉である。12は灰色の強い灰白色を呈し、ややガラス質で光沢のある胎土である。呉須の発色は悪く、オリーブ灰色を呈し、梅花文とその反対側には笹文を描く。畳付は無釉で、釉際の処理は揃う。畳付端内側に砂が付着する。内面は口縁部を除き無釉である。

13は肥前系の染付仏飯器である。胎土は白色の強い灰白色である。底部の中央部を浅く削り取り、周辺部を幅広の輪高台状に残す。輪高台状部分は無釉で、釉際の処理は揃い、砂が付着する。外面全体に細かい気泡が見られる。

14 は産地不明のミニチュア白磁碗である。胎土は白色の強い灰白色である。外面全体に型押成形による菊弁文を施す。

15 は肥前系の高台が「八」の字状に開く碗の蓋である。胎土は白色の強い灰白色を呈し、外面にはつまみ内を除き瑠璃釉を施す。つまみ端部は無釉で、釉際の処理は揃う。見込の中央部はややくぼむ。

16・17 は肥前系の染付広東碗の蓋である。16 は白色の強い灰白色の胎土である。つまみ端部は無釉で、釉際の処理は揃う。17は白色の強い灰白色を呈する精良な胎土である。呉須の発色は悪く、灰色がかった藍色を呈する。つまみ端部は無釉で、釉際の処理は揃う。

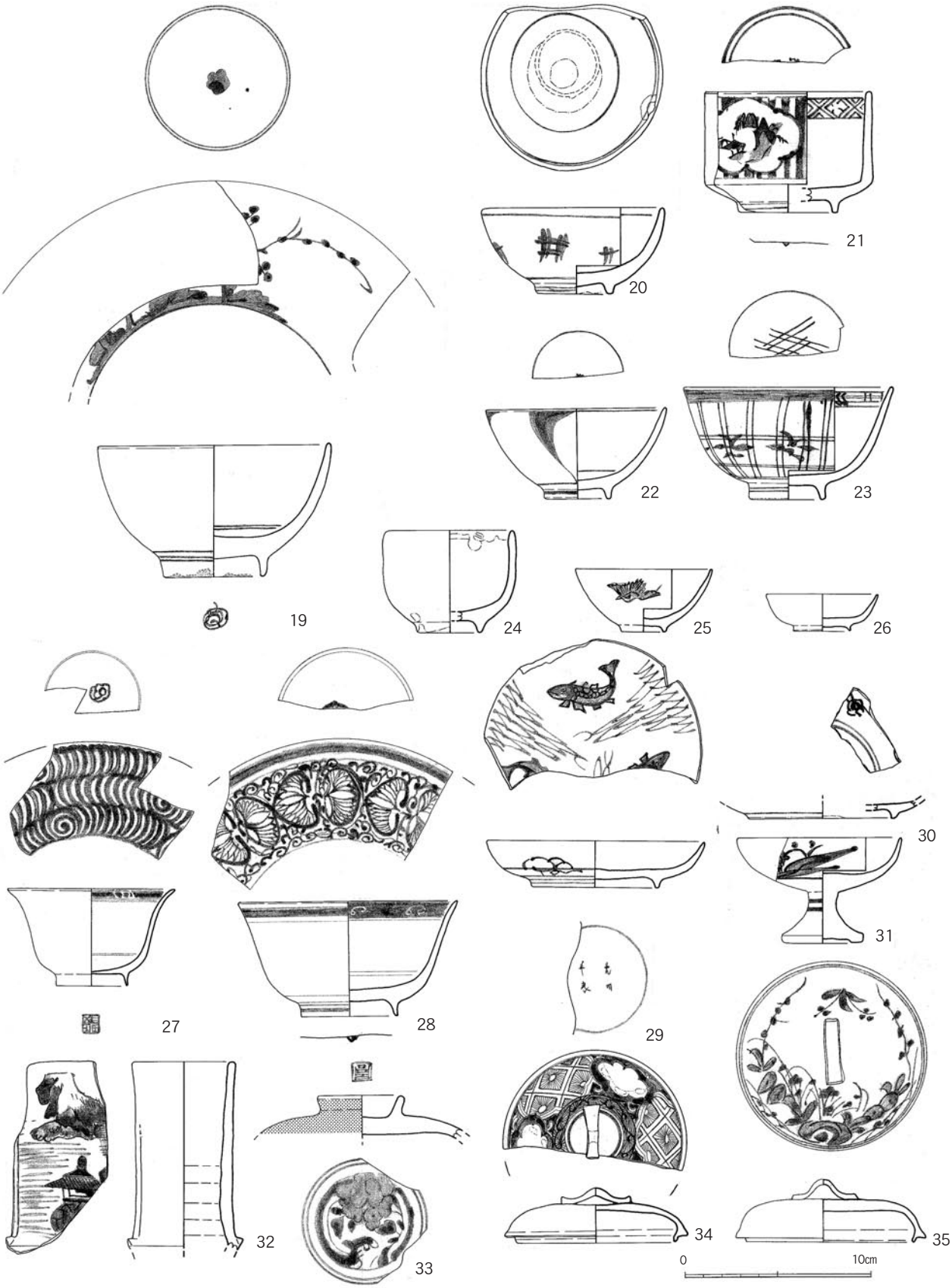
18 は瀬戸・美濃系の染付端反碗の蓋である。胎土は白色の強い灰白色である。口縁部内面には墨弾きによる如意頭文を描く。

**２）包含層出土**（第 13 図、図版第３）

**第 13 図** 19 ～ 35 は包含層出土の磁器である。

19・20 は肥前系のくらわんか手の染付碗である。19 は灰白色の胎土である。畳付は無釉で、畳付および高台端内外面全体に砂が付着する。見込にはコンニャク印判によるつぶれた五弁花文を施し、高台内には染付による「渦福」銘を描く。呉須の発色は比較的良好である。20 は白色の強い灰白色の胎土である。畳付は無釉で、釉際の処理は揃う。畳付端内側に砂が付着する。見込は蛇ノ目状に釉剥ぎされ、その部分に重ね焼きの痕跡が見られる。全面に細かい気泡が見られる。21 は肥前系の染付筒形碗である。焼成不良で、胎土は灰白色を呈し、透明釉は白濁している。畳付は無釉で、釉際の処理は揃い、釉際の露胎部は橙色を呈する。見込と高台内には染付による文様が見られる。22 は肥前系の染付小広東碗である。胎土は白色の強い灰白色である。畳付は無釉で、釉際の処理は揃う。見込には染付による一重圏線内に文様を描く。23 は肥前系の染付端反碗である。胎土は灰色の強い灰白色である。畳付は無釉で、釉際の処理は揃う。畳付から高台端内面にかけて砂が付着する。24は肥前系の碗である。胎土は白色の強い灰白色である。外面と口縁部内面に瑠璃釉を施す。畳付と高台内は無釉で、畳付に砂が付着する。

25・26 は肥前系の小坏である。25 は灰白色の胎土である。畳付は無釉で、釉際の処理は揃う。コンニャク印判による鶴文を３方向に施す。26は白色の強い灰白色の胎土である。畳付は無釉で、釉際の処理は揃う。体部の約 1/3 を欠くが、残存部に文様は見られない。




**第 13 図　工学部実習棟地点包含層出土磁器**（縮尺：１／３）

27・28は瀬戸・美濃系の染付端反碗である。27は白色の強い灰白色の胎土である。畳付は無釉で、釉際の処理は揃う。口縁部内面には墨弾きによる如意頭文を描き、見込には染付による雲気文、高台内には染付による一重方形枠内変形字銘を描く。28は白色の強い灰白色の胎土である。畳付は無釉で、釉際の処理は揃う。口縁部内面には墨弾きによる如意頭文、見込と高台内には染付による文様を描く。

29は肥前系の染付皿である。胎土は白色の強い灰白色である。畳付は無釉で、釉際の処理は不揃いである。畳付端内側にわずかに砂が付着する。内面全体に染付による網目文と、コンニャク印判による魚文を施す。高台内には染付による「大明年製」銘を描く。呉須の発色は悪く、青灰色を呈する。

30は景徳鎮窯系の青花皿である。胎土は白色の強い灰白色である。畳付は無釉で、釉際の処理は揃う。畳付端に粗い砂粒がわずかに付着する。高台内はカンナ削りである。

31は肥前系の染付仏飯器である。胎土は白色の強い灰白色である。底部の中央部を浅く削り取り、周辺部を幅広の輪高台状に残す。輪高台状部分は無釉で、釉際の処理は揃う。全面に貫入が入る。

32は関西系の花生けまたは筆立てである。残存部がわずかなため器形は不明であるが、体部外面に縦方向の浅い溝があり、外面の残存部下端に節状のものが見られる。胎土は灰白色を呈し、ガラス質で光沢がある。呉須の発色は良好で、透明感のある群青色を呈する。内面にも施釉し、下半部はロクロ目が顕著である。

33は筒江窯（佐賀県山内町）の青磁染付の碗蓋である。胎土は白色の強い灰白色である。外面に明緑灰色の青磁釉を施し、内面とつまみ内には透明釉を施す。つまみ端部は無釉で、釉際の処理は揃う。つまみ内には染付による二重方形枠内に退化した「筒江」銘を描く。34・35は肥前系の段重または蓋物の蓋である。34は白色の強い灰白色の胎土である。身の口縁部を受ける部分とかえりは無釉である。染付による文様と赤色の色絵を施す。35は灰白色の胎土である。呉須の発色は悪く、青灰色を呈する。身の口縁部を受ける部分とかえりの外面は無釉で、全体に砂が付着する。染付による草花文を描く。完形である。

## ２．陶　　器

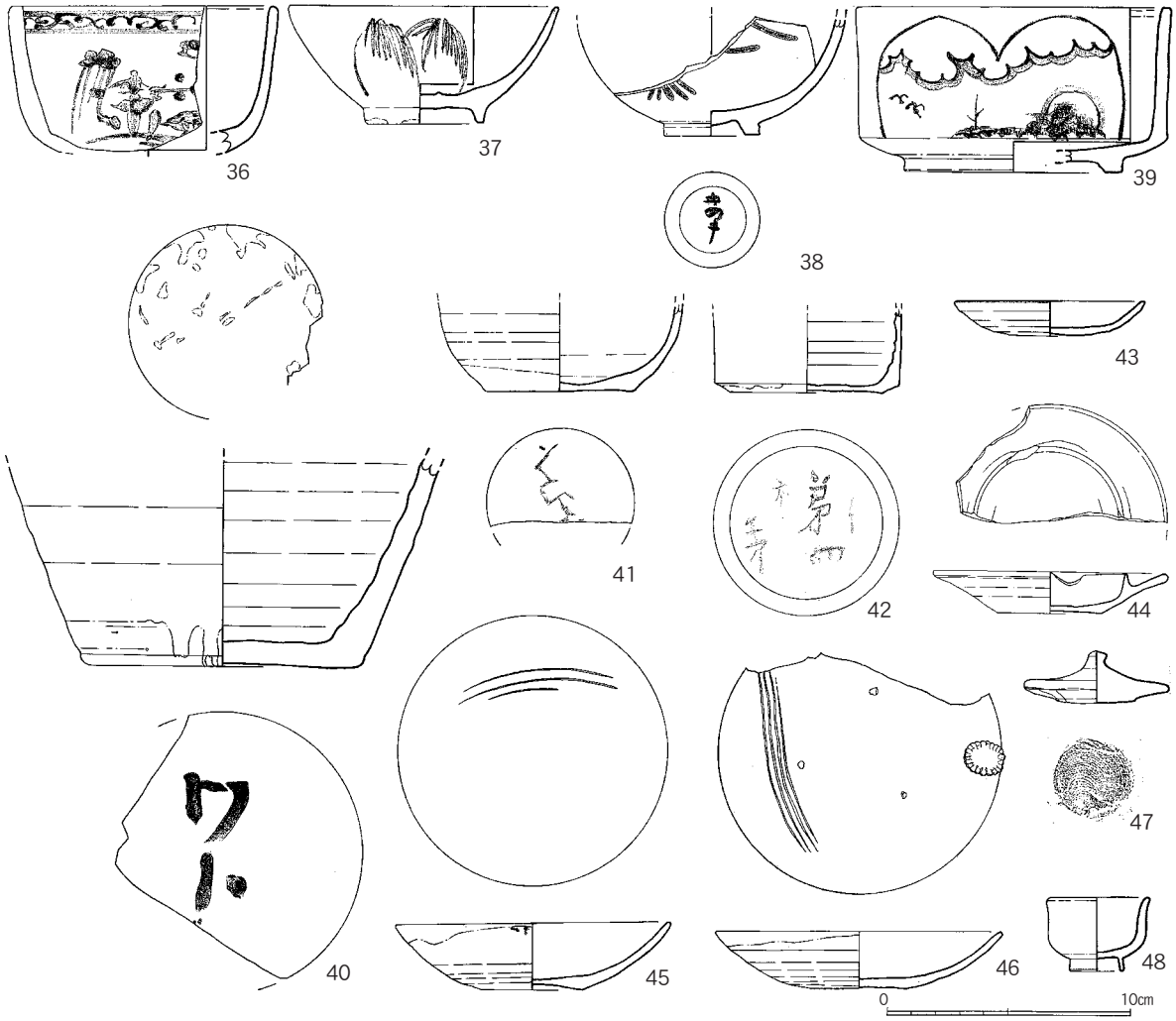
### １）遺構出土（第14図、図版第４）

**第14図**36～48は遺構出土の陶器である。36は溝３、37は南北トレンチ土坑群№.１、38～41・43・44・46は溝５、42・45・47は溝４、48は溝２出土である。

36は肥前系の陶胎染付碗である。胎土は灰色の強い灰白色を呈し、粗い。見込には中央部を除き擦痕が見られる。全面に貫入が入る。

37は瀬戸・美濃系の碗である。体部外面に柳文の鉄絵を描き、畳付と高台内を除き灰釉を施す、いわゆる柳茶碗である。胎土は黄味を帯びた灰白色である。全面に貫入が入る。南北トレンチ土坑群№.３出土の破片と接合する。

38は京・信楽系の碗である。体部外面に色絵によるしめなわ文を描き、体部外面下部から高台内を除き灰釉を施す、いわゆるしめなわ文茶碗である。胎土はやや黄味を帯びた灰白色を呈し、硬質である。文様部分を大きく欠損するが、しめなわのワラ部分を緑色で上絵付したと思われる。また、文様は不明であるが、赤色の上絵具も見られる。断面台形の幅広の高台をもち、高台端外側はわずかに面取りする。高台内は兜巾となり、墨書が見られる。全面に貫入が入る。




**第 14 図　工学部実習棟地点遺構出土陶器**　（縮尺：１／３）

39 は京・信楽系の蓋物である。胎土は体部がやや灰色の強い灰白色、底部が黄味を帯びた灰白色を呈し、やや硬質である。白化粧土を掛けたのち、鉄絵・白泥・染付による風景文を描き、灰釉を施す。口縁端部から口縁部内面および、体部外面下部から高台内は無釉である。断面台形の幅広の高台をもち、高台端外側はわずかに面取りする。全面に貫入が入る。

40は大谷焼の甕である。胎土は赤色を呈し、白色砂粒を多く含む。体部外面下部から底部外面を除き光沢のある鉄釉を施す。底部内面には、重ね焼きの痕跡と思われる釉薬の剥がされた部分が数箇所見られるが、砂の付着はない。内面はロクロ目が顕著である。底部外面には板目状圧痕と墨書が見られる。

41・42 は大谷焼の瓶の底部である。41 は赤橙色を呈する緻密な胎土である。体部外面下部から底部外面を除き光沢のある鉄釉を施すが、内面の光沢はやや弱い。底部外面は同心円ケズリ調整で、不明瞭な墨書が見られる。42 は赤色を呈する緻密な胎土である。内面と底部外面を除き光沢のある鉄釉を施す。底部外面は同心円ケズリ調整で、にぶい赤褐色を呈し、不明瞭な墨書が見られる。

43は備前焼の灯明皿である。胎土は灰色を呈し、硬く焼き締まる。口縁部外面から内面全体にかけて胎土と同色の塗土を施す。残存する口縁部の外面全体に灯芯油痕が見られる。外面は回転ヘラケズリの痕跡が顕著である。

44は京・信楽系の灯明受皿である。胎土は浅黄橙色である。内面は灰釉を施し、貫入が入る。口縁部を除いた外面と内面の仕切の端部は無釉で、釉際の処理は揃う。釉際の露胎部は橙色を呈する。内面の仕切にはＵ字形の切込が１箇所見られる。底部外面は同心円ケズリ調整である。外面全体にススが付着する。

45・46は京・信楽系の灯明皿である。45は浅黄橙色の胎土である。口縁部外面から内面全体にかけて灰釉を施し、細かい貫入が入る。内面には櫛目を施す。口縁部外面には灯芯油痕がまだらに見られ、外面全体にはススが付着する。底部外面は同心円ケズリ調整で、やや上げ底である。完形である。46は黄味を帯びた灰白色の胎土である。口縁部外面から内面全体にかけて灰釉を施し、細かい貫入が入る。釉際の処理は直線的に揃う。内面には櫛目と貼付けの菊花文を施し、ピン痕が３点見られる。残存部に灯芯油痕およびススの付着は見られない。底部外面は同心円ケズリ調整である。

47は産地不明の水注の蓋である。胎土はにぶい橙色である。蓋の上面は鉄釉の上に灰釉を施し、下面は無釉である。底部には回転糸切り痕が見られる。完形である。

48は京・信楽系のミニチュア端反小坏である。胎土は灰白色である。体部外面下部から高台内を除き灰釉を施し、細かい貫入が入る。高台は高く、高台端外側はわずかに面取りする。ほぼ完形である。

**２）包含層出土**（第15図、図版第５）

**第15図**49～62は包含層出土の陶器である。

49は肥前系の陶胎染付の筒形碗である。胎土は灰色の強い灰白色を呈し、粗い。見込にコンニャク印判による花文を施す。全面に気泡が見られる。

50は瀬戸・美濃系の鎧茶碗である。胎土は黄味を帯びた灰白色である。外面は口縁部が鉄釉、胴部から高台内にかけては灰釉の掛け分けで、内面は鉄釉を施す。

51は京・信楽系の碗である。胎土は黄味を帯びた灰白色を呈し、硬質である。体部外面下部から高台内を除き灰釉を施し、釉際の露胎部は橙色を呈する。高台端外側は面取りする。体部外面に鉄絵を描き、全面に貫入が入る。

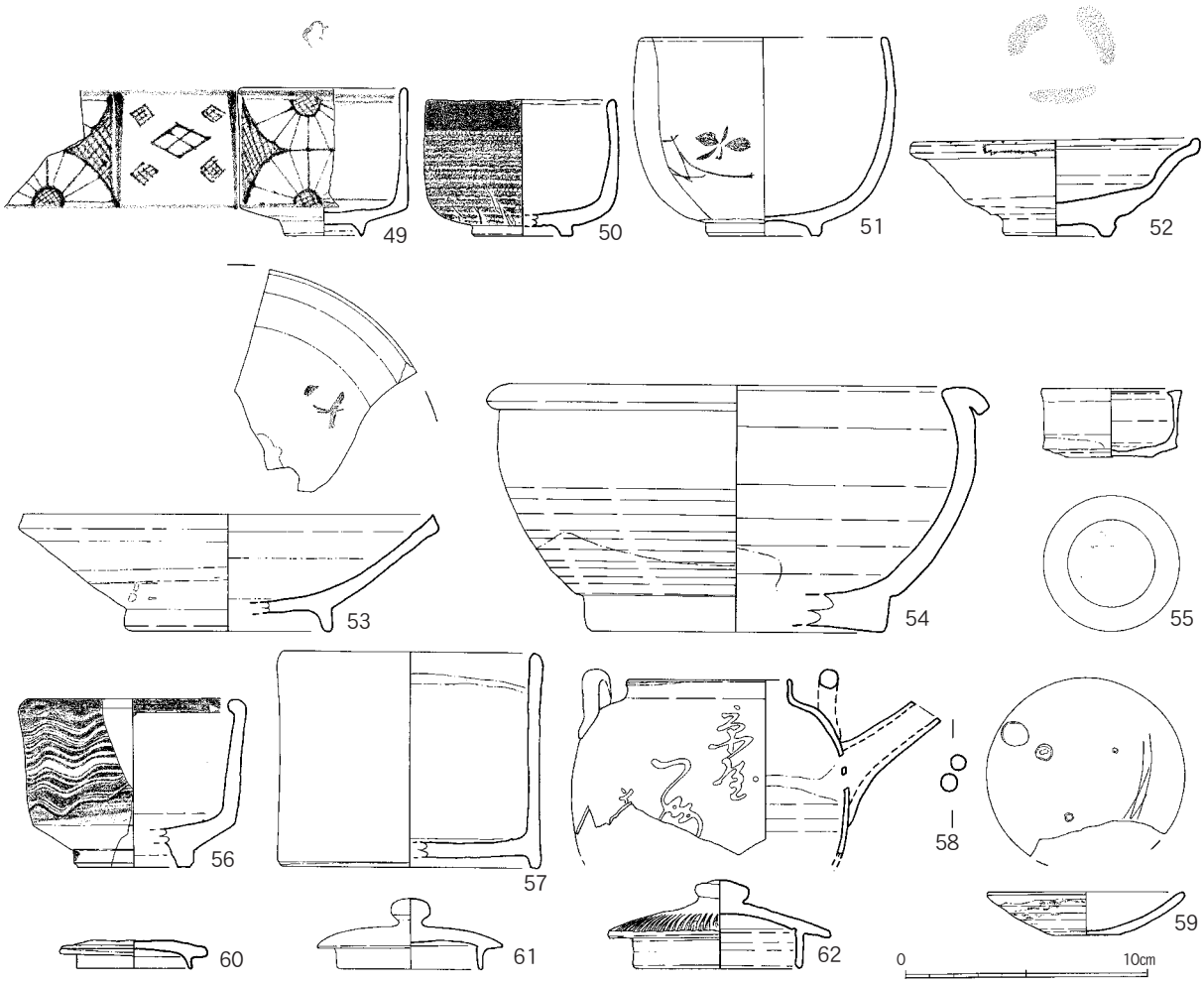
52は肥前系の皿である。胎土はにぶい橙色を呈し、硬く焼き締まる。畳付を除き灰釉を施す。見込には砂目が３箇所見られ、畳付にも砂が付着する。口縁端部にタール状の炭化物の付着が見られる。

53は瀬戸・美濃系の皿である。体部外面下半から高台内を除き灰釉を施し、見込を蛇ノ目状に釉剥ぎする、いわゆる輪禿皿である。胎土は黄味を帯びた灰白色を呈し、砂粒を多く含み粗い。口縁端部は外傾し、断面三角形を呈する。高台は畳付を丸くおさめる。見込の釉剥ぎ部分に「さ」の字の墨書が見られる。

54は瀬戸・美濃系の練鉢である。胎土は黄味を帯びた灰白色を呈し、砂粒を多く含み粗い。体部外面下部から底部外面を除き灰釉を施す。全面に大きく貫入が入る。

55は京・信楽系の合子である。胎土は黄味を帯びた灰白色である。蓋受け部と底部外面を除き灰釉を施す。底部には不明瞭な墨書が見られる。全面に貫入が入る。

56は肥前系の香炉である。胎土は灰色を呈し、硬質である。体部外面に鉄釉と白泥による刷毛目装飾を施す。口縁部を除く内面と体部外面下部から高台内は無釉で、露胎部はにぶい赤褐色を呈する。断面台形の高台をもち、高台端外側は面取りする。見込には粗い砂粒が少量付着する。



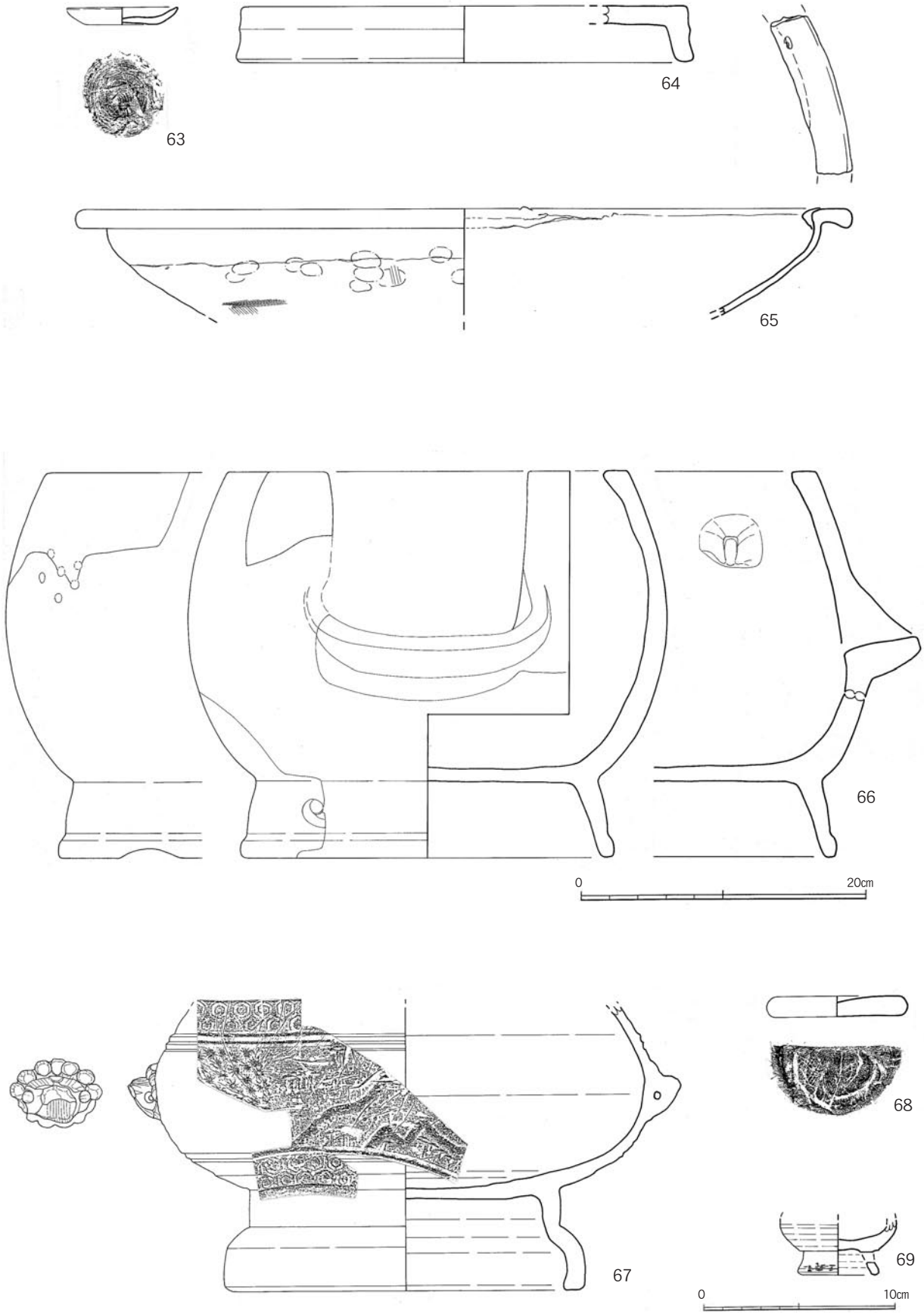

**第 15 図　工学部実習棟地点包含層出土陶器**　（縮尺：１／３）

57 は京・信楽系の灰落としである。胎土は黄味を帯びた灰白色を呈し、硬質である。口縁部内面と外面全体に白化粧土を掛けたのち、高台を除き透明釉を施す。全面に明瞭な貫入が入る。口縁端部には敲打痕、見込には環状の重ね焼きの痕跡が見られる。内面と高台内に降灰が見られる。

58 は産地不明の土瓶である。非常に薄手であり、胎土は黄味を帯びた灰色を呈し、硬く焼き締まる。外面には灰釉、内面下半には鉄釉を施す。体部外面には白泥により文字をイッチン描する。

59 は京・信楽系の灯明皿である。胎土は黄味を帯びた灰白色を呈し、やや硬く焼き締まる。口縁部外面から内面全体にかけて灰釉を施し、細かい貫入が入る。釉際の処理は直線的に揃う。内面には浅く櫛目を施し、円盤状の粘土を貼り付ける。内面にピン痕が３点見られる。外面にはタール状のススが付着するが、明瞭な灯芯油痕は見られない。

60 は京・信楽系の蓋物の蓋である。胎土は黄味を帯びた灰白色を呈し、硬質である。外面には灰釉を施し、細かい貫入が入る。内面は無釉である。釉際の露胎部とかえりの端部は橙色を呈する。内面には降灰が見られる。完形である。61 は京・信楽系の土瓶の蓋である。胎土は浅黄橙色である。外面には灰釉を施し、明瞭な貫入が入る。身の口縁部を受ける部分とかえりは無釉であるが、内面中央部に粗く灰釉を施す。完形である。62は産地不明の土瓶の蓋である。胎土は浅黄橙色を呈し、硬質である。外面に鉄釉を施し、内面は無釉で、露胎部は橙色を呈する。外面には飛鉋を施す。完形である。




**第 16 図　工学部実習棟地点出土土器**（縮尺：１／３、66 は１／４）

## ３．土器・土製品（第16・17図、図版第６）

**第16図**63～69は土器である。土器には遺構出土のものと包含層出土のものがあり、65・66は溝５、67は溝４、69は溝１出土であり、63・64・68は包含層出土である。

63は土師質の皿である。胎土はにぶい橙色を呈し、金雲母と赤色砂粒を含む。底部には回転糸切り痕が見られる。

64は土師質の火消し壺の蓋である。胎土はにぶい橙色を呈し、白色・赤色砂粒と金雲母を多く含む。内外面ともにナデによる調整である。

65は瓦質の焙烙である。胎土は芯部が暗灰色、表面近くが浅黄橙色を呈し、金雲母を含み焼き締まる。体部外面上部には明瞭な粘土接合痕と指頭圧痕が見られる。口縁部は内外面ともにヨコナデ調整で、体部外面下部はナナメハケのちナデ調整である。体部内面はナデ調整により平滑に仕上げられている。口縁部は折縁形で、内側に粘土を貼り付け、上から貫通しない穿孔を１箇所施している。体部内面下半には炭化物が、口縁部内面から外面全体にはススが付着する。

66は土師質の火鉢・焜炉類である。口縁から切り込む窓をもち、窓下部は前方へ張り出し出窓となる、いわゆる風炉である。胎土はにぶい橙色を呈し、金雲母のほか白色・赤色砂粒を多く含み、表面が硬く焼き締まる。体部は粘土紐を輪積みし、回転台成形を行い、高台と出窓を貼り付けている。内面上部には、３方向に貼り付けられていたと思われる円錐状の突起が１箇所残存する。体部上部には６箇所の穿孔が見られる。高台には印花による文様を施し、畳付には三日月形の切込を２方向に施す。高台内を除き外面には赤彩を施す。内面と口縁部上端および出窓にはススが付着する。溝４出土の破片と接合する。

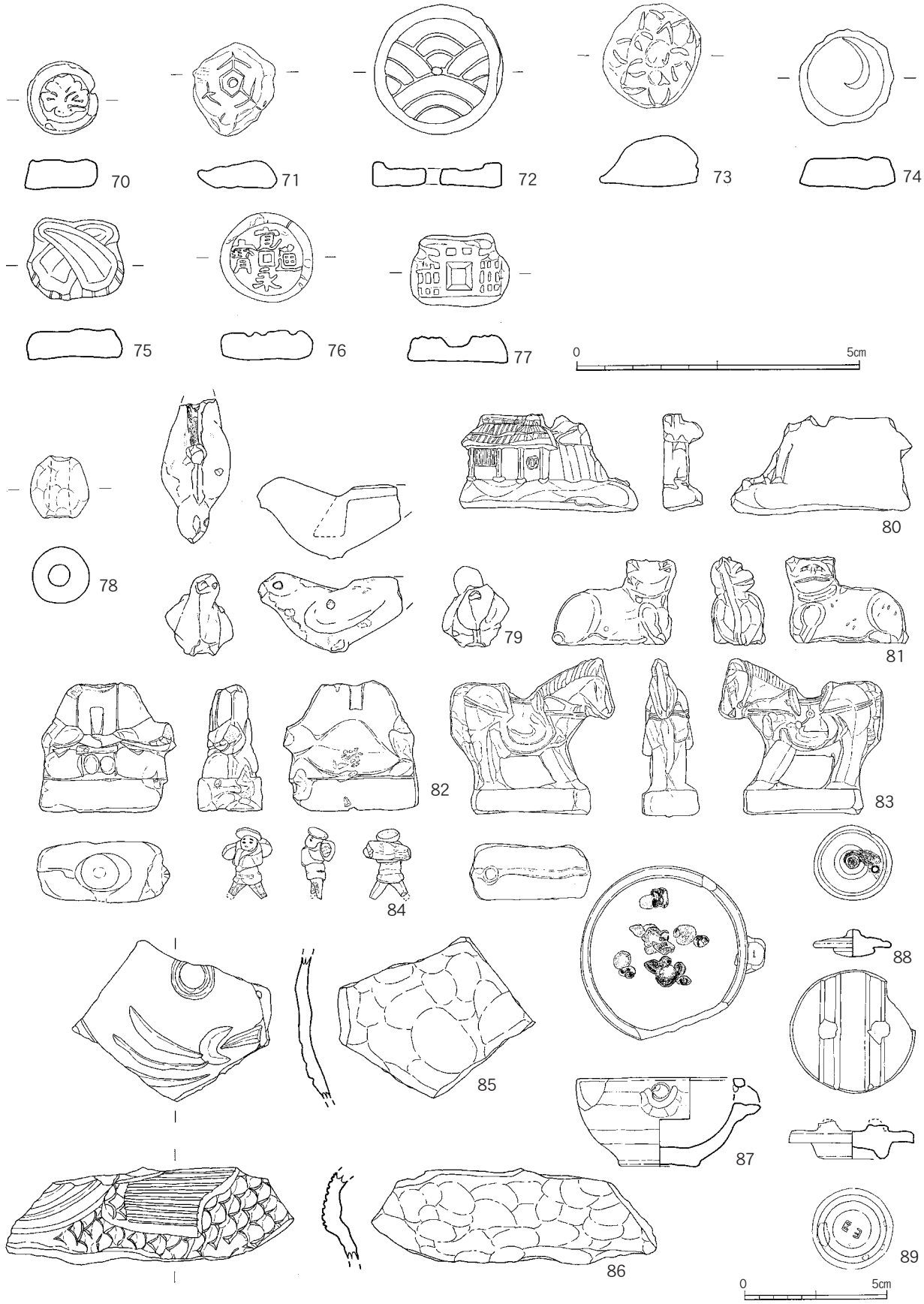
67は瓦質の火鉢・焜炉類である。いわゆる瓶掛形で、段を有する高い高台部をもち、外面の最大径部に獅子頭の把手を貼り付け、把手の側面には貫通する穿孔を施す。胎土は芯部が灰色、表面近くが灰白色を呈し、精良で焼き締まる。ロクロ成形の高台部に型合わせ成形の体部を貼り付け、内外面ともに回転ナデを施している。外面の最大径部には型押による菊花文と風景文、その上下には印花による亀甲文を施す。

68は土師質の焼塩壺の蓋である。胎土はにぶい橙色を呈し、白色・赤色砂粒と金雲母を多く含む。蓋の上面中央部はわずかにくぼみ、下面には布目痕が見られる。

69は土師質のみそ焼き皿である。胎土は橙色を呈し、緻密である。全面に柿釉を施し、貫入が入る。高台には、みそを焼く際に火箸などを通すための穿孔を２方向に施す。内外面にススが付着する。

**第17図**70～89は土製品である。土製品には遺構出土のものと包含層出土のものがあり、72は溝４、77・79は溝２、78は東西トレンチ土坑群、81・83は溝５、82は溝３、86・89は溝６出土であり、70・71・73～76・80・84・85・87・88は包含層出土である。

70～77は泥面子（面打）で、すべて完形である。70・71は橙色を呈し、赤色砂粒と金雲母を含む胎土である。70は鶴文を型押する。72はにぶい橙色を呈し、金雲母を含む硬く焼き締まる胎土である。銭貨をモチーフとした波文を型押し、中央部に穿孔する。73は橙色を呈し、金雲母を多く含む胎土である。花文を型押する。74は橙色を呈し、金雲母と赤色砂粒を含む胎土である。巴文を型押する。75はにぶい橙色を呈し、金雲母を含む胎土である。家紋を型押する。76・77は橙色を呈し、金雲母と赤色砂粒を含む胎土である。76は寛永通宝、77は鳥居を型押する。




**第 17 図　工学部実習棟地点出土土製品**（70 ～ 77 は縮尺：１／１、78 ～ 89 は１／２）

78は土錘である。胎土は赤橙色を呈し、外面全体に指頭圧痕が見られる。完形である。

79は土師質の鳩笛である。胎土は灰白色である。左右型合わせ成形で、背と尾の部分に穿孔する。にぶい赤橙色の彩色の痕跡が見られる。

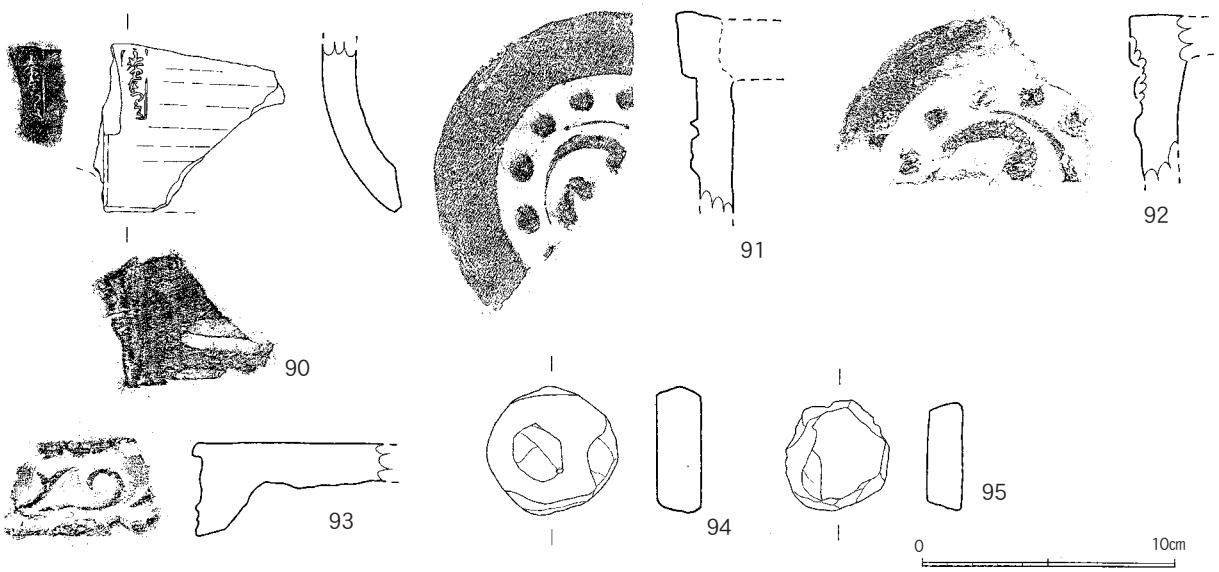
80は土師質の箱庭道具の家屋である。胎土はにぶい橙色を呈し、金雲母と赤色砂粒を含む。前後型合わせ成形である。彩色を施していた可能性がある。完形である。

81は猫の土人形である。胎土はにぶい橙色を呈し、金雲母と赤色砂粒を含む。中実の前後型合わせ成形で、前面に黒色の彩色の痕跡が見られる。ほぼ完形である。82は天神の土人形である。胎土は芯部が灰色、表面近くがにぶい黄橙色を呈し、金雲母のほか白色・赤色砂粒を含む。中実の前後型合わせ成形で、底部に円錐形の穿孔が見られる。83は飾り馬の土人形である。胎土はにぶい橙色を呈し、金雲母のほか赤色砂粒を多く含む。中実の左右型合わせ成形で、底部に穿孔が見られる。黒色の彩色の痕跡が見られる。完形である。84は旅人姿の土人形である。胎土は浅黄橙色を呈し、硬く焼き締まる。顔と足の前面に茶色の彩色が見られ、全体に釉薬の痕跡も見られる。手捏ねである。85･86は魚の土人形である。胎土は浅黄橙色を呈し、金雲母と赤色砂粒を含み硬く焼き締まる。中空の左右型合わせ成形で、内面全体に明瞭な指頭圧痕が見られる。

87は土師質のミニチュア片口鉢である。胎土は浅黄色を呈し、砂粒を多く含み粗い。内面に赤褐色の釉薬と緑釉で花文を描き、その上から透明釉を施す。88は土師質のミニチュア土瓶の蓋である。胎土は浅黄色である。蓋の上面には透明釉を施し、緑釉を流し掛けている。蓋の下面全体に指紋の痕跡が見られる。89は土師質のミニチュア羽釜の蓋である。胎土は淡赤橙色を呈し、硬く焼き締まる。蓋の上面には柿釉を施し、貫入が入る。

## ４．瓦（第18図、図版第７）

第18図90～95は瓦である。瓦は多量に出土したが、このうち特記すべきものについて報告する。91・93は溝５、94・95は溝３出土であり、90・92は包含層出土である。



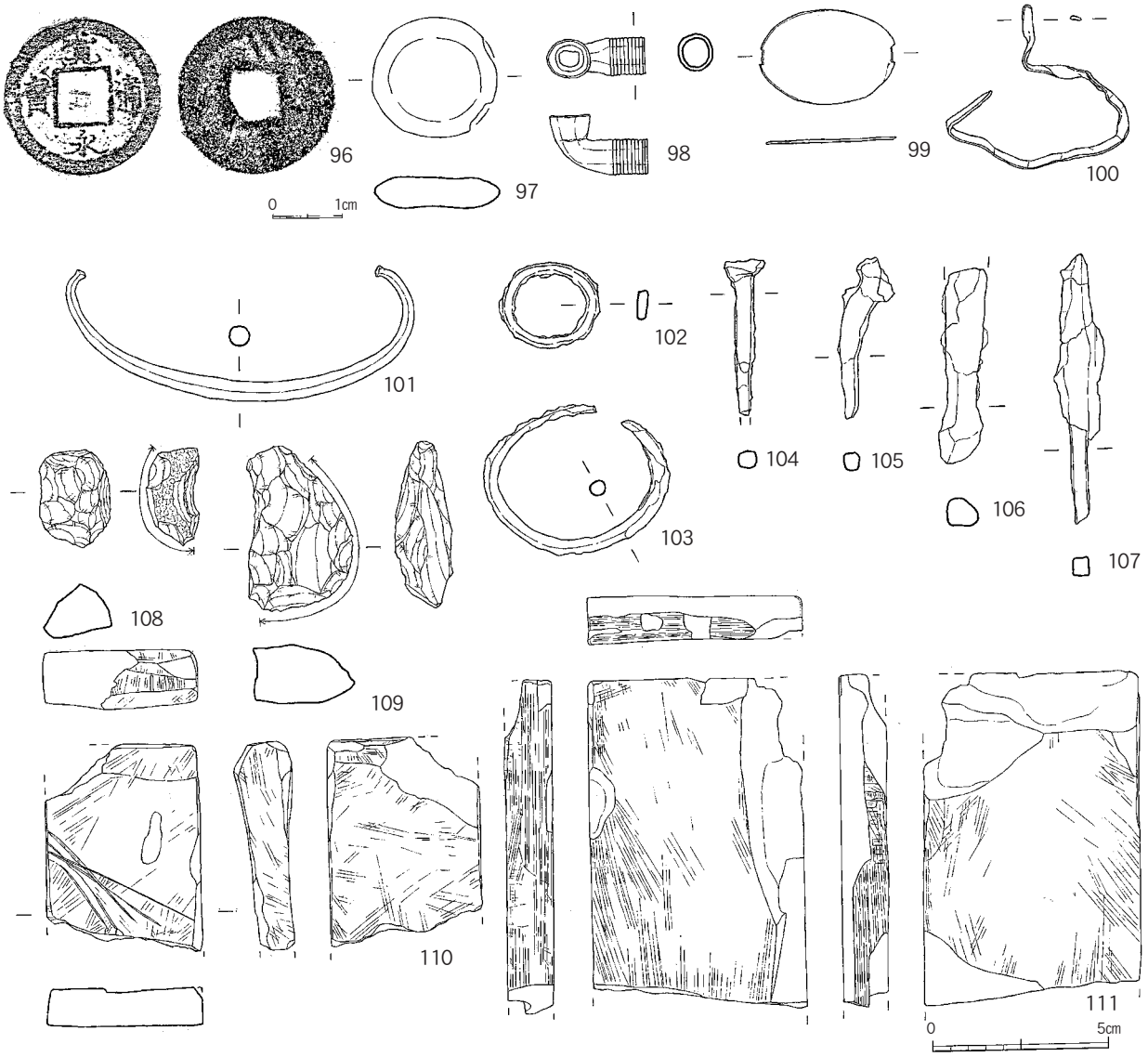

**第18図　工学部実習棟地点出土瓦**（縮尺：１／３）

90は丸瓦である。胎土はやや灰色の強い灰白色である。凸面は縦位のヘラナデ調整、凹面は縦位の叩き板ののち布目痕が見られる。凸面には方形枠内「？右衛門改」の刻印が施されている。91･92は軒丸瓦、93は軒平瓦または軒桟瓦である。

94・95は加工円盤である。94はやや灰色の強い灰白色の胎土である。側面は丸く調整され、片面に浅い線刻のようなものが見られる。95はやや灰色の強い灰白色の胎土である。側面の調整はあまり行われず、凹凸を残す。

## ５．金属製品・石製品（第19図、図版第７）

第19図96・98～107は金属製品である。金属製品には青銅製品と鉄製品がある。出土場所は96・100が溝５、98・99・102が溝４、105が南北トレンチ土坑群№.１、107が溝６、101・103・104・106が包含層である。




第19図　工学部実習棟地点出土金属製品・石製品（縮尺：１／２、96・97は１／１）

96 は寛永通宝である。いわゆる新寛永銭である。背面に文様は見られない。98 は青銅製の煙管の雁首である。99 は青銅製の円盤である。100 は銅線である。101 は青銅製の把手である。102・103 は鉄製の環である。104 ～ 107 は鉄釘である。体部はすべて断面方形をなし、104・105 は端部を折り曲げて頭部としている。

**第 19 図** 97・108 ～ 111 は石製品である。石製品には碁石と火打ち石、および砥石がある。出土場所は 109・111 が溝４、110 が溝６、97・108 が包含層である。

97 は碁石であり、黒色の粘板岩製で径 1.8 ㎝、厚さ 0.4 ㎝のサイズである。108・109 は淡緑色チャート製の火打ち石で、成形時に生じた剥離面と、使用時に生じた敲打痕が認められる。成形にあたっては粗い剥離を繰り返すことで平面が楕円形となるラウンドスクレーパー状に仕上げているようにみえる。矢印で囲んだ範囲に敲打痕が認められるが、108 の方が顕著である。108 の重量は 9.92g、109 の重量は 25.16g である。なお 109 は本来の製品の約 1/3 が欠損した状態である可能性もあり、その場合、本来の重量は 75g 前後になるものと推定できる。110・111 は凝灰岩製の砥石である。110 は端側面を除く３面に研ぎ面をもつ砥石で、研ぎ面の１面には直線上の削痕が認められ、端側面には成形時の石鋸の削痕が残る。111 は端側面を含む４面に研ぎ面をもつ砥石で、置き砥石であろう。

## 第４節　小　　結

工学部実習棟地点の試掘調査は、ごく短期間の限定的な調査であり、ほとんど暗中模索の状態ではあったが、幸いにして、常三島遺跡には近世武家屋敷跡が比較的良好な状態で遺存している事実をつかむことができた。基本層序にかんする大枠を認識することもでき、絵図面類を参照することによって、各屋敷地に入居した住人のデータを入手可能であることも判明した。ここで生活を営んだ諸階層の徳島藩士が、それぞれの俸禄や役職などといった要素とどのような対応関係をもちながら日常の消費生活を送ったのか、この点が個別具体的に把握できる可能性を導いたことは、最大の成果だといえよう。

試掘調査の結果、性格の判明した遺構としては、溝４・５という併走する２条の溝があげられる。これらは屋敷地と屋敷地とを隔てる境界部分に該当することが、絵図面との比較検討の結果判明した。使用した絵図は安政年間（1854 ～ 1860 年）作成の「御山下島分絵図」（個人蔵）中の「常三島」であり、溝４と５の検出地点をこの絵図にあてはめてみると、九代大坂卯歓太の拝領屋敷地と七代遠山荒五郎の拝領屋敷地との境界にあたるものと判断された。このことによって、各屋敷の境界部分には溝があるという漠然とした基本認識には到達できた。しかし調査時点では、これら２条の溝がどのような施設を伴うのか、あるいは伴わないのかを検討するには至らなかった。当初、２条の溝の間にある帯状の掘り残し部分ないし土手状の高まり部分に築地塀でもあったのだろうかとも考えてはみたが、確たる証拠を入手できなかったのである。この問題については、２条の溝が常三島遺跡における普遍的な境界区画のありようであることが判明するまでのデータ蓄積が必要であった。そしてこの点が確定的となった第３次・４次調査を待って、その後の溝と土手をめぐる活発な論争へとつながってゆく。もちろん、溝１や溝２のような、屋敷区画の内部にあって、絵図面に記載された屋敷の境界線とは対応しないものの、排水溝として一定期間機能していた遺構も存在することが判明したのであるが、こうしたものの性格につ

いてはなお未解明な部分が多い。

また調査地の地盤は湧水が顕著で非常に脆弱なことが判明した。近世においても現在の状況と近似した地盤であったことはほぼ確実と考えられるので、宅地としての環境は劣悪であったと推定される。本地域では井戸を掘削しても水質の関係で飲料水を汲み上げることは不可能であるため、飲料水の確保に際しては別の方策がとられた可能性が高い。なお徳島城との地理的関係を考慮すれば、工学部実習棟地点は瀬戸内海側の防御正面の一角をなすことが容易にみてとれる。城下町の地割計画を策定するにあたっては城郭の防衛が最重視され、武家屋敷の配置もその一環に組み入れられていたことが各地の事例から解明されてもいる。したがってこの常三島に武家屋敷を配置する際には、劣悪な居住環境を無視してまでも城郭を中心とした防衛戦略的配慮が優先されたとみなさざるをえず、本調査成果はこうした消息を裏づける資料として評価しうることとなろう。

工学部実習棟地点の試掘調査成果は、本地域における埋蔵文化財がこうした諸側面への検討作業に十分に耐えうる性格のものであることを明らかにしたといえ、ひいては徳島藩における武家が、幕藩体制のもとで甘受した生計状態、経済活動等の実状を考古学的な側面から証明し、文献史では対処しえない部分を補うものとなりうる。

なお当初の目的のひとつであった、遺跡の年代が中世までさかのぼるか否かの追求については、本試掘調査では湧水が激しかったために下層を掘り下げることが不可能となり、断念せざるをえなかった。